



紙と自分 阪本順治

一本の映画を作るとき、一冊の新品のノートを用意する。その映画の為に創作ノートである。表紙に使い始めた年月日と、映画の題名を書き、それが準備の第一歩となる。そして、一ページ目、心構えや注意すべき点などを書き、あとはアトラダムに日々浮かんだアイデアを書き記して行く。

自分で脚本も担当するとき、起承転結のハコ書きとそのディテールのメモで、遠くから見れば蛾が群がっているように見えるほど、細かい文字でページの紙が埋まる。そのノートは映画の全ての作業が終わるまで、私の側から離れない。

撮影中は、映像的なアイデアと共に、日々の反省、残された課題の整理、あるいは他人への怒り、自分への怒り、「ああ、だめだ」という文字、「まだ、いけない」という文字、そしてなぜか、「ふと蘇

った思春期の嫌な記憶、など。撮影終了後も、音楽や効果音、編集についてのメモを書き連ね、ほぼ最後のページまで紙を使い切る。

映画の完成後、脚本は、どこかにしまい込んで、このノートはいつでも手に取ることができるように、私の机のすぐ脇に並べてある。過去に、手掛けた作品の分だけ、並べてある。そして、時々手に取り、今の自分は、過去の自分と比べて、急いではいないだろうか、気持ちが弱まってはいないだろうか、確認する。

時には、失意の言葉を見つけて読まなきゃよかったと思ったり、時には、バカで稚拙な言葉に笑ってしまう。パソコンの中では文字はデータでしかないけれど、紙の上に直接書かれた文字は、感情の記録だ。筆圧や文字の斜め具合、あるいは色線をはみ出した文字の大きさで、何年も前のことが鮮明に思い出される。自分が思い出される。

紙というのは大方、直接手に触れるものだ。ノートも書籍も書類も。そこにあるのが文字であっても、絵であっても、文学的であっても、事務的であっても、その「紙」に「手」で触れる以上、それは誰かからの「手紙」といえる。思っただから、私の過去の創作ノートは自分からの「手紙」だ。



阪本順治(さかもと・じゅんじ) 1958年、大阪府生まれ。横浜国立大学在学中より石井聰互監督らの現場に、スタッフとして参加。89年「どついたるねん」で監督デビューし、芸術選奨文部大臣新人賞他多数受賞する。以降コンスタントに撮り続け、代表作に「00年「顔」」02年「KT」、05年「亡国のイジス」、新作「魂萌え!」が1月下旬から公開中。

してももうひとつ、映画には、脚本という「手紙」がある。私も以前は原稿用紙に直接鉛筆で書いていた。監督デビューする前、助監督の頃だ。それも、原稿用紙だったら何でもいいというわけではなく、紙の質や線の色、升の大きさにこだわって、あちこちの文具店を渡り歩いた。これだという原稿用紙を見つけて買いた。まだ、机の引き出しにその当時使い切れなかった冊が封をされたまま入っている。何か、便箋代わりや下書き用にと思っただが、もったいなくて使えない。

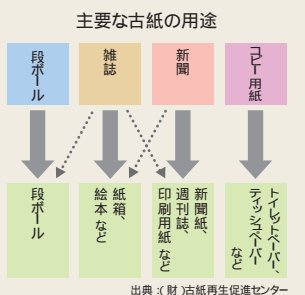
そう思って二十年ほど経った。私はこの二十年前の原稿用紙を将来、いつ、どんなときに使うのだろうか、予想が付くのは、それはきっと、私が幸せで仕方がないときだと思っ。なぜなら、助手の仕事はきつかったけど、希望に溢れ、幸せで仕方がないときに買った原稿用紙だから。そして誰かの手に触れて、幸せが伝わる「手紙」になっていれなと思っ。

PAPER Q & A Vol.10

Q. なぜ、古紙は分けて回収するのですか?

A. 分別することで、より質の高い紙に生まれ変わるからです。

古紙は新しい紙につくり直すことのできる大切な資源ですが、その種類ごとに利用される製品の用途が違います(右図)。せっかく集めても、異なる種類が混ざっていると、良質な紙として再生することができません。また、金属やプラスチック、粘着物のついた封筒、感熱紙など、紙に再生する際に障害になるものを取り除くことも大切。分別して古紙の価値を高めることが、より質の高い紙づくりに役立ちます。



今回は3月8日号、伊藤たかみさんです。